

ラポール20号記念特別企画

20歳の頃、

どんな本を読んでいたか

ラポールが記念すべき20号を迎えました。

「20」にちなんだ特別企画として、“人生の先輩”たちが20歳の頃に読んでいた本を紹介します。

若いうちからできる・・・
旅に出よう！

栄養学科 教授

吉池信男

昔の大学生はヒマだったのだろうか。ぼくはちょっとした休み（週末でも）があれば、「旅」に出ていた。学校の勉強でいえば社会科、特に「地理」が好きで、ずいぶん小さな頃から地図や時刻表を眺めていた。そんなぼくに“火をつけた”のは、「何でも見てやろう」という1冊の本だった。読んだのは、高校3年生の受験勉強の合間だったと思う。

書評では無いので、中身については紹介しない（興味があったら読んでみて）。小田実という著者のことも、みんなほとんど知らないだろう（昔の若者はよく知っていたと思う）。とり

あえずは、チョー“濃い”人による、相当モーレツな旅の日記と思ってもらえばいいかな。その旅はずいぶん古い時代のことで、ぼくが生まれる前の1960年ごろの話。20年後にそれを読んでもとっても新鮮で（50年後の今、君たちが読んでもそうだと思う）、特にぼくはハッとしてグッとなってしまった。同じように、沢木耕太郎（この人の作品は読んだ人もいるよね）は、この本の影響を受けて26歳の時に香港からロンドンまでの旅に出た。その時の話が「深夜特急」という全6巻のベストセラー。

一方、吉池信男は、大学2年生（まさに20歳頃）の春休みに、アルバイトと奨学金？で貯めたお金で、南回り（この意味わかるかなあ？）のヒコーキに乗って、初めての海外旅行（というよりもヒコーキが初めて）に飛び立った。まあ、どうでもいいことだけど、ロンドン（“旅のはじめ”に大英博物館は外せない）→アムステルダム→ケルン（ここまでは普通っぽい）→西ベルリン→【恐ろしいベルリンの壁；国境越えは地下通路から】→東ベルリン→グダニスク→クラコフ→ワルシャワ→プラハ→ウィーン

→ケセグ (Kőszeg) →ブダペスト→ベオグラード→イスタンブール→カッパドキア→エフェス→イスタンブール→フィレンツェ→ローマというルート。今でこそ、ヨーロッパは「ユーロ」なんて友好ムードだけど、冷戦下で「西」と「東」が分断されていて、共産主義諸国の国境（鉄砲をもった兵隊がものものしく並んでいる）を真夜中に越え、まだ雪の残る東ヨーロッパを旅した。そういえば、アウシュビッツにも行ったけれども、これは「夜と霧」(V・E・ فرانクル) の影響だった。移動の半分以上は夜行列車や夜行バス（つまり「深夜特急」の世界）で、トルコでは4晩連続夜行バスなんて、若いからできたことと今さらながら感心している。

沢木耕太郎みたいに自分の旅の形を本にできなかったのも、そのころのぼくと同じ年齢の君たちに伝えておこうと、恥ずかしながら、どうでもいいことをあれこれと書いてしまった。

春はもうすぐ。お気に入りの本を鞆にいれて、旅に出よう！

※同じ頃読んだ“庄司薫くん” っぽい文体としました。



写真は、次の旅（ミャンマー）でとったもの



『何でも見てやろう』
小田実
講談社文庫
講談社
290.9||O17



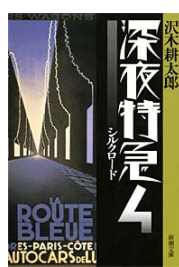
『深夜特急1
香港・マカオ』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||1



『深夜特急2
マレー半島・シンガポール』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||2



『深夜特急3
インド・ネパール』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||3



『深夜特急4
シルクロード』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||4



『深夜特急5
トルコ・ギリシャ・地中海』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||5



『深夜特急6
南ヨーロッパ・ロンドン』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||6



『夜と霧』
ヴィクトール・E・フランクル著
池田香代子訳
みすず書房
946||F44



『赤頭巾ちゃん気をつけて』
庄司 薫
新潮文庫
新潮社
913.6||Sh96